

「あはれ」と「もののあはれ」の研究

文学博士 山崎 良幸 著

「あはれ」と「もののあはれ」の研究

—特に源氏物語における—

風間書房

昭和61年11月5日 印刷
昭和61年11月15日 発行

『あはれ』と『もののあはれ』の研究

定価 五、五〇〇円

著者 山崎良幸

発行者 風間 務

印刷者 志賀道成

発行所

株式会社 風間書房

101東京都千代田区神田神保町一の三四

電話(二九一)五七二九番

振替 東京 一一八五三番

(奥田印刷・矢嶋製本)

ISBN4-7599-0664-9

序

「物語は、物のあはれを見せたるふみぞ」（玉の小櫛二）と言ったのは本居宣長であつた。このことばに信をおくならば、「もののあはれ」の本質を理解することは、そのまま物語、ひいては日本文芸の本質を知ることにつながる。と解してよいであろう。

「あはれ」ないしは「もののあはれ」の研究で、歴史的な意味をもつと考えられるものは思いのほか多くはないのである。それらの中で特に秀れた労作とされているものは、哲学的考察かまたは美学的研究であつて、「あはれ」と「もののあはれ」が言語として、何を表現しているかについての研究は、宣長以来ほとんどなされなかったと言っても言い過ぎではないように思われる。

宣長は周知のように、「あはれ」はうれしにつけ、悲しにつけ、心に深く感じることをいうのだとした。これを一言にしていえば、いわゆる「しみじみとした感動」だということになる。そこで一般に文脈の中における「あはれ」を、「しみじみと」あるいは「しんみりした」などと訳し、またときに「趣ある」や「情趣」の意だとも解して来た。しかしながら「しみじみと」や「しんみりした」というだけでは、具体的な情緒の内容が明らかでない。例えば「あはれにをかし」という表現に対して、注釈書類では「しみじみとおもしろい」と解釈するのが普通であるが、これでは「あはれ」は、「をかし」の表現する情緒の深さの情態を表すことになってしまつて、「あはれ」という語の担う独自の意義は見失われてしまうことになる。また「趣」や「情趣」というのは、かなり高度の観照であらう

が、少なくとも平安時代中期頃までに、例えば自然に対してそういう観照的態度が生まれていたかについては、はまだ疑わしいのである。いずれにしても源氏物語の注釈書類によるだけでは、「あはれ」の用いられている文の真意は精確に捉えられないのである。それはどの注釈書によってもあまり変りがない。

哲学的、美学的研究も、また文芸学的研究においても、もしかりに「あはれ」の意義が精確に理解されていなかったとしたら、それらの研究もしょせんは実の伴わないものになってしまうのではないかと不安がのこる。何よりも「あはれ」の意義を究めることが、こうした方面の研究をおし進めて行くためにも、大事な前提になると考えられるのである。

「あはれ」の語の担っている意義は何か。現代語の「あわれ」は、「しみじみとした感動」の表現でもなければ、「趣」や「情趣」の意を表しているでもない。もし中古語、とりわけ源氏物語における「あはれ」の意義が通説のごとくであるとすれば、いつ頃、どのようにして現代語の「あわれ」のもつ意義に変わって来たのか。そこで上代語の「あはれ」の意義が何であるかを知ることが必須となるわけであるが、意外にもその研究がこれまででなされていないのである。本書はまずその研究から出発している。ところで上代語、とりわけ記紀や万葉集における「あはれ」の意義は通説とは違って、いわば広義の愛憐の情の表現であった。そこで改めて源氏物語以前の主だった文献における「あはれ」の用例のすべてについて、考察を試みたのである。そこで「あはれ」は、「しみじみとした感動」の表現でもなければ、「趣」や「情趣」の意でもないらしいことが明らかにしたのである。

本書の研究の目的はもと「源氏物語のあはれの研究」にあった。上代語の「あはれ」はもとより、源氏物語以前の平安時代の文献における「あはれ」の意義も通説のごとくではないとすると、源氏物語の「あはれ」の意義につ

いても、当然検討し直してみなければならぬことになるわけである。詳しい考察はすべて本書の叙述に譲ることにするが、源氏物語における「あはれ」もまた広義の愛憐の情の表現であることが明らかになった。それによって従来精確でなかった「あはれ」の用いられている文の意味もまた明晰に理解されることになるのである。

本書においては、「あはれ」だけでなく、「ものあはれ」や「もののあはれ」の意義についても考察を加えた。本書における研究が源氏物語をはじめ、広く物語や和歌、日記、隨筆等を読む上にも貢献するところがあるならば、著者の喜びこれに過ぎるものはない。

なお本書には極めて多くの用例が考察の対象とされている。それらの用例における「あはれ」の意義を知ろうと願われる読者のために、和田明美、ふじ子姉妹の厚意により、巻末に用例索引を付することができた。読者の検索の便に供せられるならばさいわいである。

一九八六年二月二十五日

山崎 良幸

三	土佐日記における「あはれ」……………	四九
四	古今和歌集における「あはれ」……………	五四

第三章	平安時代（中期）の「あはれ」……………	六三
-----	---------------------	----

一	蜻蛉日記における「あはれ」……………	六三
二	大和物語における「あはれ」……………	六七
三	枕草子における「あはれ」……………	六九

第四章	源氏物語における「あはれ」……………	一一七
-----	--------------------	-----

一	従来の「あはれ」の解釈……………	一一七
二	「あはれ」の対象とその上接語と下接語……………	一二九
三	源氏物語の用例による「あはれ」の意義の考察……………	一三〇
四	「ものあはれ」の意義……………	一八九
五	「ものあはれ」の意義……………	一五五

用例索引

第一篇 序 説

第一章 従来の研究

一 本居宣長の「あはれ」と「もののあはれ」の論

周知のように、宣長は『源氏物語玉の小櫛』二の巻において次のように述べている。

まづすべてあはれといふはもと、見るものきく物ふるる事に、心の感じて出る、歎息ナゲキの声にて、今の俗言ウソコトバにも、あゝといひ、はれといふ是也、たとへば月花を見て感じて、あゝ見ことな花ぢや、はれよい月かななどいふ、あはれといふは、このあゝとはれとの重なりたる物にて、漢文に嗚呼などあるもじを、あゝとよむもこれ也、古言に、あな又あやなどいへるあも同じ、又はやともはともいへるはも、かのはれのはと同じ、又後の言に、あつはれといふも、あゝはれと感ずる詞にて、同じこと也、さて後の世には、あはれのはもじを、音便にてわといへども、古へはすべてかやうのところもみな、本の音のままに、はもじは、葉齒などの如くとなへしなり、殊に此あはれといふ言は、歎く声にて、あゝとはれとの重なりたるなればさら也、古語拾遺に、あはれを言フ天晴也といへるは、いみじきひがことなれども、これにても、そのかみはれを晴のごとくとなへしことをしるべし、かくていにしへの歌に、あはれとよめるは、「ひとつ松あはれ」、「あはれその鳥」、「あはれいくよのやどなれや」、「あ

はれむかしへ有きてふ、などのたぐひは、感じて直に、あはれと歎きたるまをいへるにて、此の詞の本也、即ち「あはれ」は「ああ」と「はれ」とが結びついて生じたことばで、「見るものきく物ぶる事に、心に感じて出る歎息の声」だと解した、彼は更に続けて、

あはれと見るあはれときく、あはれと思ふなどいふたぐひは、(中略) ああはれと感じて、見聞思ふ也、又あはれなりといふたぐひは、ああはれと感ぜらるるよし也、又あはれをしる、あはれを見す、あはれにたへず、などいふ類は、すべて何事にまれ、ああはれと感ぜらるるさまを名づけて、あはれといふ物にしていへるにて、かならずあはれと感すべき事にあたりては、その感すべきころばへをわきまへしりて、感ずるを、あはれをしるとはいふ也、又物をあはれふといふ言も、もとああはれと感ずること也、(増補本居宣長全集第七・四九〇―四九二頁)

ここでは「あはれ」がいわゆる「歎息の声」即ち感動詞から、体言ないしは情態詞として用いられる場合について述べている。「あはれをしる、あはれを見す、あはれにたへず、などいふ類」の「あはれ」は単なる「歎息の声」の域から既に体言化した表現であるが、それを彼は「すべて何事にまれ、ああはれと感ぜらるるさまを名づけて、あはれといふ物にしていへる」、即ち「ああはれと感ぜられる心の情態」を「あはれ」というと規定したのである。そして「あはれをしる」とは、「ああはれ」と感すべき対象に対しては、どのように感ずべきかを真に認識して、その上で「ああはれ」と感ずるのをいう、と説明した。

彼は更に、後世「あはれ」に哀の字を書いて、それを悲哀の意とのみ思うことについて、次のように述べている。

後の世には、あはれといふに、哀の字を書て、ただ悲哀の意とのみ思ふめれど、あはれは、悲哀にはかぎらず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべてああはれと思はるは、みなあはれ也、

さればあはれにおかしくとも、あはれにうれしくとも、つらねていへり。それはおかしきにもうれしきにも、あはれと感じたるを、あはれとはいへる也、但し又、おかしきうれしきなどと、あはれとを、対へていへることも多かるは、人の情のさまざまに感ずる中に、うれしきことおもしろき事などには、感ずる事深からず、ただかなしき事うきこと、恋しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることこよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわきても、あはれといへるなり、俗に悲哀をのみいふも、その心ばへ也、

後世「あはれ」に「哀」の字を当てるのは精確でない。「何事にまれ、あはれ」と思われるのはみな「あはれ」だ。「ただかなしき事うきこと、恋しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることこよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわきても、あはれといふ」のだ。俗に悲哀をのみいうのも、「その心ばへ」だと言っている。ここでは「あはれ」を感動の深さに求めていることが察せられるのである。そこで次のような発言となる。

字書にも、感は動也といひて、心のうごくことなれば、よき事にまれあしき事にまれ、心の動きて、あはれと思はるるは、みな感ずるにて、あはれといふ詞に、よくあたれるもじ也、漢文に感^{ゼシム}鬼神^{ゴクン}と有て、古今集の真名序にも、然書れたるを、かな序には、おに神をもあはれと思はせ、とかかれたるにて、あはれは、物に感ずることなるをしるべし、

ここでは「あはれ」は感動の表現だということになる。今日「あはれ」を感動のことばとする通説もここから出てゐるわけなのであらう。

「物のあはれ」については、「物」は「言^{コト}を物いふ、かたるを物語、又物まうで物見物いみ、などいふたぐひの物」であつて、「ひろくいふときに、添ることば」即ち「物」の総称だとしたのである。彼は次のように述べている。

さて人は、何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきころをしりて、感ずるを、もののあはれをしるとは

いふを、かならず感すべき事にふれても、心うごかず、感することなきを、物のあはれしらすといひ、心なき人とはいふ也、

そうだとすると「物のあはれ」の「物」は単なる物の総称であるに止まらず、心を動かすはずの何物かをもっている対象のこととなり、「物のあはれをしる」とは、そういう対象に対して感動する心をもっていることのいいだといふことになる。

ひっきょうするに、宣長のいう「あはれ」にはいわゆる感動詞として用いられるものと、名詞として用いられるものとがあつて、前者は「あはれ」と感ずることであり、後者は「あはれと感ぜられる心の情態」をいうわけである。そして「物のあはれ」とは、心を動かすはずのものをもっている対象に対して、感動することだということになる。彼は「あはれ」ないしは「物のあはれ」についてこのような理解をもった上で、彼のいわゆる「物のあはれ論」を展開するわけであるが、そこでは既に「あはれ」や「物のあはれ」の意義的究明の域を越えた、いわば彼の物語論ないしは文学論となつているのである。それ故それは本書の意図する「あはれ」の研究の領域外にあることなので触れない。ただ言えることは、もしかりに「あはれ」の語としての意義を誤って理解しているところがあるとしたら、その「あはれ論」は従つて誤つたものになってしまうであらう。われわれは何よりもこのことを考慮に入れておかなければならない。そこに本書が純粋に「あはれ」の意義の追究を試みようとしている理由があるわけなのである。

二 宣長以後の「あはれ」の研究

宣長以後の「あはれ」の研究でまず注目すべきは、和辻哲郎の『日本精神史研究』中に収められている「『ものものあはれ』について」であろう。しかしこれは「あはれ」ないしは「ものものあはれ」の意義の研究ではない。それは「ものものあはれ」論とでもいふべきものであらう。彼はまず宣長の、「ものものあはれ」が何を表すことばであるかについての言説を紹介した上で、次のように述べている。

宣長の用語法に於ける「物のあはれ」がかくの如き意味であるならば、それは我我の用語法に於ける「感情」を対象に即して云ひ現はしたものと見ることが出来よう。⁽¹⁾

更に「ものものあはれ」の「もの」については、

宣長は「もの」といふ言葉を単に「ひろく云ふ時に添ふる語」とのみ解したが、しかしこの語は「ひろく云ふ」ものではあつても「添ふる語」ではない。物いふとは何らかの意味を言葉に現はすことである。物見とは何物かを見ることである。更にまた美しきもの、悲しきものなどの用法に於ては、ものは物象であると心的状態であるを問はず、常に「或もの」である。美しきものとはこの一般的な「もの」が美しきといふ限定を受けてゐるに他ならない。かくの如く「もの」は意味と物とのすべてを含んだ一般的な、限定せられざる「もの」である。限定せられた何ものでもないと共に、また限定せられたものすべてである。究竟のEsであると共に Allesである。「ものものあはれ」とは、かくの如き「もの」が持つところの「あはれ」——「もの」が限定された個々のものに現はると共にその本来の限定せられざる「もの」に帰行かんとする休むところなき動き——に他ならぬであらう。⁽²⁾

彼はこうして、宣長の「ものものあはれ」論から出発して「ものものあはれ」の文芸学的、哲学的考察を試みているのである。それは本書とは直接かわりのないところなのでおくことにしたい。われわれの関心は「あはれ」並に「も

の「あはれ」の意義に關することなのである。

彼が宣長の「もののあはれ」を「感情を対象に即して云ひ現はしたものと見」たのは、ほぼ正鵠を得た解し方であろうと思う。しかしながら「もののあはれ」の「もの」については宣長のいうのと必ずしも同じではない。即ち彼は『もの』は意味と物とのすべてを含んだ一般的な、限定せられざる『もの』である。限定せられた何ものでもないと共に、また限定せられたもののすべてである。究竟の Es であると共に Alles である」とする。そして『もの』の「あはれ」とは、かくの如き『もの』が持つところの『あはれ』であると解したのである。

次に岡崎義恵と大西克礼に「あはれ」についての考察があるが、前者は文芸学的、後者は美学的考察を試みたものであつて、何れも「あはれ」の意義が何であるかを追究したものではないが、一応触れておくことにしたい。岡崎はその著『日本文芸学』において「あはれの考察」をしているが、彼の「あはれ」の意義についての考えは「源氏物語に於ける美の諸相」で述べている次の言葉によつて知ることができる。

「あはれ」は優美と悲哀との中間にあるもの、「をかし」は優美と滑稽との中間にあるものではなからうか。「あはれ」は殆ど純粹に優美といつてもよいやうな場合があり、その際には「をかし」と同じやうなものと考へられる。風趣ありといふやうな意味の場合はこれである。しかしこの場合でも「あはれ」は暗く、「をかし」は明るいといふ特色を失つてゐない。さうして「あはれ」はその暗さの方向に進んで、憂鬱・悲哀といふべき場合があるが、その時でも若干の優美さを含んでゐるのである。それと同様に「をかし」は明るさの方向に進んで滑稽・快活といった意味になることがあるが、平安時代ではさういふ場合でも優美さを失つてゐない所に特色がある。⁽³⁾

彼は何よりも「あはれ」を美的概念として捉え、それを「優美」という概念において理解しようとする。彼によれ

ば、しかし「をかし」もまた「優美」を表すので、そこで両者の相違点を見ることによって、その意義を明らかにしようとした。そこから「をかし」が「優美と滑稽の中間にあるもの」であるのに対して、「あはれ」は「優美と悲哀の中間にあるもの」と規定したわけである。しかしながら意義の究明としては多少曖昧で、理解しにくい面がある。なぜなら優美が対象の属性に關することであるのに対し、悲哀は主体の情緒ないしは感情に屬することだからである。従つてその中間にあるものというのは、内容を精確に捉え難いうらみがのこるのである。

大西の「あはれについて」はどうか。彼はまず大槻文彦の大言海の記述をよりどころにして次のように言う。⁽⁴⁾

大言海に依ると、「あはれ」を三項に分けて説明し、その中感動詞としてのそれを「喜、怒、哀、樂スベテ心ニ感ズルニ発スル声」云々となし、是に「噫」の字を当て、此の感動詞が名詞形として用ゐられる場合を、更に二つに分けてゐる。その一は此の「あはれ」を、専ら賞むる意に用ゐて名詞としたもので、即ち「賞ムベキコト、優レタルコト、アツパレ」を意味し、是には「優」の字が当てられてゐる。而して「愛づ、イツクシム」と云ふ意味の動詞の「あはれむ」は、之を活用したものと見られてゐる。その二は感動詞「あはれ」を、専ら傷はしき意に用ゐて名詞形としたもので、即ち「憐ムベキコト、心ヲ傷ムルコト」を意味し、これには「哀」の字が当てられてゐる。而して「憐レニ思フ、フビンニ思フ」の意味の動詞「あはれむ」は、之を活用したものと考へられてゐる。兎に角是によつて見ても、既に吾々は「あはれ」なる語が頗る多義であるのみならず、極く大體から言つても、そこに「優」と云ふ文字に表現される一種の積極的な意味と、「哀」の字に表現される一種の消極的な意味とが―即ち一見矛盾するやうにも思はるる二様の意味が、同じ一つの言葉の中に含蓄されてゐることを知り得るのである。

彼は大言海に従つて「あはれ」の意義を三つにわけた。一は感動詞としてのそれで「噫」の字で表される。二は名

詞としてのそれで、更に二つにわかれる。一つは「賞むる意」に用いる「優」の字で表され、もう一つは「傷はしき意」に用いられて「哀」の字で表される。

彼においては、しかし「あはれ」についての語義把握が妥当であるか否かは余り問題ではなく、もっぱらその美学的追究に関心が向けられている。彼は宣長の「物のあはれ論」を批判しながら、他方、泰西の美学の方法に則って、「あはれ」の価値の構造の究明とその位置づけを試みているのである。とりわけ悲哀ないしは哀愁の感情が美的価値として発展する過程を追究することを通して、「あはれ」の美学的価値を明らかにしようとしているのである。それはしかし、「あはれ」の意義の解明とは必ずしも同じではないので、ここでは触れないことにする。それよりもむしろ、彼の論の抛りどころとなっている大言海に記されている語義のほうが本書にとっては問題なのである。

以上「あはれ」と「もののあはれ」に関する代表的な研究の中でも、多少ともその意義に関して触れたものについて述べてきた。中でわれわれの取り挙げることのできるものは、宣長の「あはれ」の語源と意義に関する説と、和辻哲郎の「もののあはれ」、とりわけ「もの」並に「もの」と「あはれ」との意味的關係についての考説であろう。岡崎義恵の「あはれ」の意義は精確さにおいて不満がのこる。また大西克礼は大言海の記述するところの意義によっているので、これについては次項において触れることにする。

注

- (1) 和辻哲郎著『日本精神史研究』中『もののあはれ』について(二二三頁)
- (2) 同書(二四〇頁、二四一頁)
- (3) 望郷第八号(昭和二十四年六月)特集「源氏物語への郷愁」(五頁)
- (4) 大西克礼著『幽玄とあはれ』中「あはれについて」(一一一～一二二頁)

三 辞書に見られる「あはれ」と

「ものあはれ」「もののあはれ」の意義

まず『増補雅言集覧』（石川雅望集、中島広足補）によると、「あはれ、愛するところ」として「君の御ところはあはれなりける物をあたは御身をなどいふに」（源・帚木・十三）外多くの用例を挙げている。次に「嘆息する声」として、「あはれさもさむき年かな」（源・末摘・廿三）外いくつかの用例を挙げている。更に「あはれむ」の用例として、「女は春を憐むとふるき人のいひ置侍りける」（源・若菜・下ノ三七）の外、「但憐大庚万株梅又背燎共憐深夜月」（朗詠）「可憐且」（遊仙窟）等を挙げた。即ち名詞「あはれ」は「愛するところ」の意とし、いわゆる感動詞としての用例には「嘆息する声」とした。また動詞「あはれむ」に対しては「憐」の漢字を当て、更に朗詠、遊仙窟中の「憐」字の訓「アハレム」を示した。⁽¹⁾

近代になってからは多くの辞書が公刊されているが、その中最も多く用いられているもの、また近年特に「古語辞典」の名を冠するものも出版されているのは周知のとおりであるが、それらの中代表的なものについて見てみることにしたい。

まず大槻文彦の『大言海』が挙げられるが、『大言海』については前項で、大西克礼の『幽玄とあはれ』の中にその要項が載せられている。

『大日本国語辞典』はどうか。これは「あはれ」を名詞と副詞と感動詞の三種に分けた。名詞「あはれ」は「感動